

猫

左から右へと
通りを足早に横切りながら
白と黒の猫が
つと立ち止まった

そして占い師のような威厳で
彼の眼をまっすぐに見据えた
託宣を告げるために

時は来た
十五年にもわたり
おまえを一顧だにしなかった
あの女人を忘れ
重荷を下ろし
眠りにつけと

そして猫は
歩き去っていった
なにこともなかったように